

師走の日々からー2025年に向けて

石川 康宏

〔1〕

年末12月22日の午後、イシカワは保険医協会・東海4県の代表が集まる会合で、自公過半数割れという総選挙後の新しい情勢の下、企業団体献金の禁止など目前の課題での広い共闘づくりとともに、めざすべき新しい日本の社会像を探る対話が必要だとして、平和の問題ではベトナム戦争終結後のアセアンの取り組みや日米安保条約廃棄の展望などを語っていた。3時すぎになって名古屋から新大阪に向かう新幹線に乗り込んだイシカワは、前の座席の背面からテーブルを引っ張りだし、愛用のA4版の大型ノートを広げていった。

「総選挙に知事選と、お疲れさまでした。総選挙の結果は、新しい展望も開きました。そこで、来年2025年の平和運動の展望と課題について、論稿をお寄せいただけませんか。字数は文字だけで9000字となります。締め切りは12月25日です。いかがでしょうか」。

そんなメールが本誌編集部から届けられたのは、1ヶ月ほど前になる11月27日のことだった。メ切まで1ヶ月か。こり

や無理だな。すでに年末の仕事がいろいろ入っている。だいたい1ヶ月でこんな大きなテーマの『論稿』を書かせようというのがまちがっている。そんなことを心のなかで思いつつ、イシカワは翌日次のようなメールを返していた。

「まじまった論文調の文章を書くゆとりはありそうにありません。年内に『兵庫県知事選挙』と『マルクスのケア労働論』について書かねばならないのです。エッセイ調の少し軽い文章でよければ、多少長くてもなんとかなるかも知れませんが。ご検討ください」。

平和委員会代表理事という立場上、何も書けない／書かないとは言いがたいが、できればこの話は編集部の側からなかったことにしてほしい。そんな願いを込めての返信だったが、編集部からは押しの一手の回答が届いた。

「事実上の新年号でもありますので、表題が『エッセイ調』ということが伝わるものであれば、それも読者に歓迎されると思います」。

これはもうしかたがない。しかし「表題が『エッセイ調』」

ってどんなんだ。そもそもエッセイって何なんだ。その言葉を先に使ったのは自分の方なのに、当面のスケジュールの込み入り具合をながめながら、イシカワは明らかに気乗りしないままこれを引き受けていった。

それから新幹線の中の今の今まで、あつと言う間に時間は過ぎて、メ切までの残り時間は足かけ5日。客観的に見ればほぼ手遅れのアウトである。だが、書き物人生40年のわが身には、その間に養われた火事場の馬鹿力というべきものがある。そこには、短時間に仕事をやりぬく集中力や体力といった正攻法のみではなく、短時間に労せずして多くのマスを埋める巧妙な技芸もふくまれる。賢明なる読者はお気づきだろう。ここまで早くも1600字が消費されていることに。

イシカワはただちに「エッセイとは何か」を調べ始めた。「1、自由な形式で、気軽に自分の意見などを述べた散文。随筆。随想。2、特殊の主題に関する試論。小論」。

「2」の方は意味がよくわからないが、「1」には初っ端から「自由な形式」とあってありがたい。「気軽に自分の意見などを述べた散文」といけそうな気がした。念のために「散文」の意味も調べてみると、わがスマホは「定型や韻律を持たない普通の文章」と教えてくれた。「普通の文章」これは特別なルールにしばられない、ルール無用の文章のことだなとイシカワは自分に都合よくこれを解釈していった。

〔2〕

唐突だが、陸上競技の三段跳びの要領でいけば、2025年の新しい年に向けたホップ・ステップ・ジャンプのジャンプの時期を、年末「師走」の月と定めても大きな間違いはないだろう。それまでの勢いを十分に活かし、最後の瞬間に力を爆発させるのがジャンプの役割だろうから。

ひよつとすると2024年の日本平和委員会の取り組みは、ジャンプを11月の平和大会と位置づけていたかも知れない。だが「自由」で「気軽」でルール無用のわがエッセイでは、そんなことは軽くスルーしておきたい。そう決定したイシカワは、放っておいても2025年に直結していく師走の日々のわが私的平和運動を振り返ることから、この原稿依頼の責めに応える糸口を探ることにした。

さて師走である。12月1日(日)は革新懇の全国交流集会に参加していた。会場はJR京都駅のちよいと南。イシカワの役割は分科会「共闘と革新懇運動」のコーディネイター。沖縄のNさんが、12月22日の「米兵による少女暴行事件に抗議する沖縄県民大会」への全国の連帯した行動を呼びかけた。これに岡山のFさんが全国統一でスタンディングなどとしてはどうかと返し、つづいて京都のMさんが「オール沖縄と連帯する伏見の会」はすでにその行動を決めていると返す。「それでは」とイシカワは全国の革新懇での連帯の取り組みをこの分科会で決議しようと呼びかけ、90名ほどの参加者の総意を

確かめた。上位下達式でない、集まりに参加したすべての人が運動づくりの主人公となる、そうした会合の運営で少しはお役に立てただろうか。

2日(月)・3日(火)は週末の講演準備や兵庫県知事選挙の原稿準備が主だった。郵便物を開いていくと、山形と大阪から12月8日に街頭で配布するという「赤紙」が届いていた。「臨時招集令状」つまりは○月○日○時にどこそこの軍隊に来いという命令書である。受け取る側に自主的な判断の余地はない。「おクニのために命を散らせるのが名誉」という、個人の上に国家がおかれた時代の話である。とはいえ「国の決めたことにさからうな」という有形無形の圧力はいまも小さくない。それをね返す力の根本は「私には誰にも侵され得ない人権があり、それを守るこそ国家の役目」という一人一人の確信だろう。時にイシカワもまじめにものを考える。

4日(水)は群馬で行なわれている日本医労連の春闘討論集会にオンラインで参加した。ご依頼は群馬の安中市まで来てほしいというものだったが、「関西から遠いのです」と西宮からの参加を許してもらった。実際、最寄り駅から安中までは片道5時間の大移動で、いくら「うまいメシと酒と温泉」があったとしても、その後5時間の復路を思うと気分はやはり重かった。イシカワは67才のおジイである。そんなおジイの体力事情や気分の事情を、元氣な現役世代に伝えていくことも必要と、ここでもイシカワは自分に都合よく物事を考え

た。

5日(木)の昼間は知事選原稿を書いていき、夜8時から「平和新聞推しデー」のポストデモに参加した。「X」が「ツイッター」を名乗っていたときには「ツイッターデモ」と呼ばれたアレである。ともかく8時から10時まで「平和新聞」の講読を呼びかける互いの投稿をリポストしあう。平和委員会にはインターネット・SNS委員会があるが、関連メンバーが登録しているLINEグループを中心とした取り組みである。ただし、この間ポストデモ参加者や投稿数が減ってきている事情もあり、この意義や効果をめぐる率直な議論が必要ではないかとイシカワは提起していた。

[3]

いざ書き出してみると師走の話は思った以上に長くなっている。そこで適当なところで区切りを入れることにした。

6日(金)は知事選に取り組んだ「憲法が輝く兵庫県政をつくる会」の幹事会への発言文書を書いていく。幹事会は10日の予定だが、その日は出席がかなわない。「会」の代表幹事で、選挙本番では名ばかりとはいえ本部長もつとめたイシカワは、これに無言というわけにはいかないのである。そのあたりイシカワはなかなか律儀でもあった。18才息子の「大合格」の発表があり、この日は夕食から祝い酒。

7日(土)は朝から知事選原稿を書いていく。午後には共

産党の全国学者・研究者後援会の世話人総会にオンラインで加わり、兵庫県知事選についてスライドもつかって短い発言を。夜9時からは共産党の小池晃さんのYouTubeチャンネルで、3日に「戒厳令」が発せられて以後の韓国の動きを、現地の「しんぶん赤旗」記者のレポートで聞いていく。事件直後に「だから日本の憲法にも緊急事態条項が必要だ」と維新の馬場代表や、国民民主の榛葉幹事長が発言していたが、イシカワは真実はまるで逆だと考えた。大統領にそんな権限を与えているから、こんな暴走が起こってしまう。

8日(日)は午後1時から堺市の革新懇での講演だった。「市民と野党の共闘」がテーマだが、イシカワは世界の国の8割が軍事同盟に入っていない、日本にもそうした選択肢があることを知らせる課題についてもふれていた。往復の電車では、内藤代表理事の『自衛隊違憲論の原点』を読む。

9日(月)は午後2時からオンラインで平和委員会の今期1回目の憲法運動委員会。同委員会の責任者はイシカワである。内藤代表理事から石破自民党総裁の誕生や総選挙後の状況下での「憲法をめぐる情勢」の報告があり、これをもとに自由に議論を交わしていった。ただし参加者は多くない。忙しい人ばかりだからというだけでなく、割り当てられた都道府県の担当者が決まっていないところが多い。解決が必要な課題である。企業団体献金の廃止が国会で大きな焦点となっているこの時期には、平和運動も「献金と軍拡」という視角

からの語りが必要だ。その議論を引き継いで、1月の委員会では白神理事とイシカワがそのテーマでの報告者となっている。

10日(木)は2時から東京・代々木の会議室で「全国生活と健康を守る会連合会」の「守る新聞」の新春企画。吉田会長との対談である。政治の流れについての話の後は、生活保護の制度や運動について多くを教えてもらう。こういう時のイシカワは貪欲である。新幹線での帰り道は、明日の企画に向けて日本経団連の軍事関連文書を読んでいた。

11日(水)は午後2時からオンラインで「平和新聞」の新春座談会。内藤・岸・イシカワの代表理事3人で「戦後・被爆80年の平和運動」を展望する。お二人の発言に学びながら、イシカワもあれこれしゃべっていく。内容はすでに「平和新聞・新春特別号」に掲載された。字数の制約でカットされた話もあるが、戦争体験者がいなくなることにかかわって、ゼミで「慰安婦」問題を学んだ学生たちが各地で語った経験を久しぶりに口にした。

12日(木)は、ノートに1月上旬までの作業日程を書いていた。ノートを新しいものに代える時「前ノートからの引き継ぎメモ」とともに、これを書くのが習慣。(当面の課題)の「書き物」欄には「12/25メ切 平和運動―私なりの運動論、2024振り返り、2025に向けて、半ばエッセイ風に」とあった。ここしばらくアマゾン・プライムでながめてきた

韓国の連続ドラマ「自白」の最終回を見る。悪しき権力者と正義の弁護士等がたたかう勧善懲悪モノだが、権力者の悪行の内容が海外軍需産業との癒着であり、しかも「不良品ヘリ」の購入が焦点。こうした権力への顔の向け方の点で、日本のドラマは数段遅れているとイシカワは思った。

13日（金）は息子の大学入学手続きだけを進めていく。

〔4〕

14日（土）は朝10時から『資本論』のオンライン研究会。10年前にはシールズの一員として安保法制とたたかった若い研究者たちと第3部を読んでいく。午後4時からは大阪府保健医協会での講演。テーマは日本経済の現在だが、イシカワは大軍拡予算の裏返しとなる生活関連予算の切り捨てが内需のさらなる縮小を生み、経済の停滞を深刻化させるという話も忘れずに。帰りの電車では「なぜみんなスマホばかり見ているのだ」「クレージー」と英語と日本語のチャポンで語る84才フランス人（そう言っていた）の会話を楽しんだ。

15日（日）は知事選原稿を書き進め、5時からオンラインでの研究会。テーマはアイスランドでのジェンダー平等で、政党や運動団体の取り組みとともに、根底にあつたろう世論の成熟を見る必要がないかといシカワもまじめに議論に参加。

16日（月）は朝から知事選原稿に向かつていき、午後には『学習の友』編集部にこれを送信。夜は神戸で「憲法が輝く兵

庫県政をつくる会」の知事選を振り返る会。イシカワの担当は議論の「まとめ」だが、まとめるほどに自己点検が深まっていけないというのがわが感想。異常が多い選挙だから、あれこれ論評したいのはよくわかる。しかし、そこに止まることなく自分と自分の団体の取り組みを正面から分析する姿勢をもたなければ。その後は候補者として大奮闘してくれた大澤ドクターの慰労会を近くの町中華で。

17日（火）は生活と健康を守る会の「守る新聞」の対談ゲラをなおして返信。午後は18才息子とボウリング。知事選のために2ヶ月ほど封印していたので、11ゲームをミッチリ投げた久しぶりの汗が心地いい。夜はオンラインでミニ研究会。

18日（水）はミニコミ紙や封書が山積み机まわりを片づける。いくつかの記事をノートに貼り付け、出てきた請求書をまとめていく。午後は「平和新聞」新春座談会のゲラをなおし、編集部にホイと返信。夕方になると「Nちゃんの保育所が大変で」と大阪南部の娘から電話が入る。「市との交渉も行ない、議員の協力も仰いでいる」「お父さんにも署名を集めてほしい」。ただちに大阪の保育運動連絡会に相談し、娘からLINEで届いた署名用紙を打ち出していく。

19日（木）は週末の講演パワポをつくり、夕方には息子と大きな本屋でマンガをゲット。一度は「陰謀論」にのめりこんだ若者が、それを次第に抜け出していき、そんな葛藤の過程を全4巻でじっくり描いたマンガに出くわしビックリ。1

冊30円の週刊『少年キング』に始まったイシカワ的マンガ人生はすでに60年になっている。

20日(金)は昼からコンビニのATM、郵便局、銀行とまわって大量の請求書の求めに応えていった。つづいて本屋の喫茶コーナーで、この『平和運動』原稿を考えようとするが、なんとリュックにノートが入っていない。気が乗らないという深層心理の表れか。予定変更で年末仕事に向けて雑誌『経済』8月号を読んでいく。とある仕事で感想を述べよと割り当てられた1冊だが、特集の1つは『経済安全保障』を問う。特に坂本雅子さんの「米国の対中国戦略と『経済安全保障』」が問題の全体像を大きく示すもので勉強になった。

2023年10月に施行された軍需産業支援法の「背景に軍需生産への進出・拡大を求める日本の企業の要求を指摘する論も多い。しかしそれ以上に米国の要求——日本全体を、米(と同盟国)の兵站・兵器整備拠点に変え、また新兵器も協同開発する兵器廠に変えていこう。有事の際に激増する軍需品の補給をしっかりと担わせようという米国の要求が大きい」。こうした諸研究を平和委員会に紹介するのも、わが身の1つの役割かとイシカワもまじめに考えた。

21日(土)は朝から兵庫革新懇と憲法共同センターの共催企画で講演。話は知事選に力が入るが、当面の政治課題の1つに「軍拡と企業献金」の話題を入れ、「軍事同盟からの脱却」も語っていく。会場で映像『レッド・パージ』のDVD

をいただき、家にもどってながめていく。戦後日本の逆コース、朝鮮戦争への突入過程で、左翼「思想」を理由に3万の市民が職を奪われた。そういう異常事態が同じ戦後憲法下の話であることを、あらためて考えさせられる。憲法の理念の実現は「国民の不断の努力」を必要とする。

[5]

ここで場面は12月22日にもどる。新幹線の前の座席からテーブルを降ろし、その上に大判のノートを広げたあの日である。結局、三段跳びのジャンプを期待したわが師走に、大した爆発力は見つからなかった。とはいえ、学習・研究面でも組織運動の面でも、新年につづく課題や成長の芽がまるでなかつたわけでもない。「戦後・被爆80年」の2025年には、歴史を振り返り、現代の位置と課題をより深くとらえ返す作業も行なわれるだろう。そんな成果にも学びながら、まだしばらくは全国の仲間と力をあわせて前に進んでいきたい。そんなことを一人勝手に再確認し、これまた一人勝手に安堵していく年末のイシカワなのであります。

(いしかわやすひろ、日本平和委員会代表理事)